


西芳実


吊いの中に生きる

二〇〇四年スマトラ島沖地震・津波被災地から



dasyat pada Provinsi Aceh, Indonesia yang terdekat dari hiposenternya. Bab ini akan meneruskan bagaimana masyarakat Aceh menghadapi dan menerima kehilangan nyawa sejumlah 170,000 jiwa.

二〇〇四年十二月二十六日、スマトラ島沖で発生したマグニチュード九・三の大地震とそれに伴う巨大津波がインド洋沿岸諸国を襲った。震源に最も近かったインドネシア・アチェ州では一七万に及ぶ人々が犠牲となった。想像もしていなかった形で突然、身近な人々を大勢失った人々は、どのようにしてその喪失を受け止めるのか。



Gempabumi berkekuatan 9.3 SR dan bencana tsunami susulannya pada 26 Desember 2004 melanda negara-negara di kawasan Samudera Hindia telah menimbulkan kerusakan dan kehilangan nyawa paling



※前ページ、前々ページ下部の翻訳文の言語はインドネシア語、翻訳は筆者による。

はじめに…不慮の死をどう受け止めるか

死は、誰にとっても避けておることのできない身近な災厄である。医療技術が進み、社会の安全が比較的維持されている日本で暮らす私たちの多くにとって、実際の死に直面する機会は少なくなっているかもしれない。しかし、だからこそ、予想していないかたちで身近な人が突然亡くなったり、あるいは、大勢の人々が一度にたくさん亡くなったりするといった「不慮の死」に直面すると、私たちは大きな衝撃に見舞われ、それを災厄と感じる。

そのことがよく表われているのは、新聞やテレビなどのマスメディアの報道だろう。事件や事故は人が亡くなるとニュースになり、亡くなった人の数が多ければ多いほど大きく報じられる。けれども、ニュースでは人が亡くなったことは報じられても、それによって身近な人を失った人たちについて触れられることはほとんどない。

この章では、災害時の死者の弔い方を見ることで、身近な人々の不慮の死を人々がどのように乗り越えようとしてきたかを考える。災害からの立ち直りについて、特に死者の弔いに目を向けることには次のような理由がある。

災厄には自然災害、戦争、大規模な事故のようにさまざまなものがあり、その被害も、建物や道路が壊れたり、経済活動が滞ったり、土地が使えなくなったりとさまざまだ。だが、壊れた建物の数や道路の長さ、その地域の所得や税金がどれくらい減ったか、作付けできなかった土地はどれくらいかの広さがあつたかなど、これらの災いでは被害が数で数えられる。そして、その被害を乗り越えたかどうかも数で数えられる。自然災害や事故や戦争が大規模になればなるほど、復興にあたっては、何をいくつつくり直せばよいか、それに費用はどれくらいかかるかなど、数で数えた目標が立てられる。

同じように、災害で亡くなった人や家族を失った人の数も数えることができる。けれども、物の復興とは違って、その数を満たせば災いを乗り越えたということにはならない。被災地の人口が災害の前と同じ人数に戻ったとしても、その被災地の死が乗り越えられたとはならない。失われた命を取り戻すことはできないし、他のもので代替したり、新しくつくり直したりすることも難しい。

実際のところは本人の心の問題なので、他人である私たちが自分の都合で働きかけても逆効果になるだけかもしれない、私たちにできることはそばに寄り添うことぐらいなのかもしれない。たとえそうであったとしても、相手が何をどのように考えているのかを知ったうえで寄り添っていたいと思う。

これは、相手がどう感じているのか直接尋ねてみればよいという簡単な問題ではない。本人も自分の気持ちをうまく言葉にできないでいるかもしれない

い。だから、その災厄とは直接関係ないことを一緒に行ったり話したりしながら、行動や言葉の端々に垣間見られる気持ちを感じとったら、それを自分の心の中にしまったまま付き合いを続けていくことになる。

この章では、人々が身近な人の不慮の死という災厄をどのように乗り越えようとしてきたかを、二〇〇四年一月のスマトラ島沖地震・津波（インド洋津波）の被災地であるインドネシアのアチェ州の経験から考える。アチェは独立派ゲリラと政府軍との内戦が三〇年も続いていた地域で、私はアチェの歴史や内戦下の人々の生活について学ぶため、内戦が最も激しかった一九九〇年代末の三年間、アチェの大学に留学して州都バンダアチェ市で暮らした。二〇〇四年の津波ではアチェの多くの人々が亡くなり、それを契機に三〇年に及ぶ内戦が終結した。それ以来、アチェは津波と内戦からの二重の復興の

道を歩んできた。

この章は、私がこれまで毎年二〜三回、現地を訪れて見聞きした経験をもとにしている。取り戻したり代替したりつくり直したりすることが難しいものを失ってしまったとき、人はそれをどのように乗り越えようとするのかを一緒に考えてみたい。国が違えば文化も宗教も違うため、日本に暮らす私たちの目から見て不思議に見えることも多いかもしれないが、違いだけに目を向けるのでなく、吊いの中に生きるという共通性を見つけてもらえればと思う。

1 スマトラ島沖地震・津波は どんな災害だったか

はじめに地震・津波と被害の規模についてまとめ
ておこう。二〇〇四年十二月二十六日の日曜日の朝、

スマトラ島の西海岸沖でマグニチュード九・三の大
地震が発生し、それにもなう巨大津波がインド洋
沿岸の地域を襲った。津波は東南アジアからアフリ
カまで広い範囲に及び、タイの海岸のリゾート地
は欧米や日本の観光客も被災した。津波の映像がテ
レビニュースでくり返し配信されたことや、クリス
マス直後というタイミングもあって、世界中の高い
関心を集め、国連が「史上最大の支援作戦」と銘打っ
た大規模な救援復興活動が開始された。

被害の範囲は二二か国に及び、死者・行方不明者
は二二万人に上った。国別に見たときに被害が最も
大きかったのはインドネシアで、特に震源に最も近
かったスマトラ島に被害が集中した。スマトラ島北
西端のアチエ州は、内陸部は山脈が走っていて人が
住みにくく、人々は主に沿岸部で農業や漁業や商業
に従事していたため、長い海岸線に沿って津波の被
害が出た。死者・行方不明者は約一七万三〇〇〇人、



写真1 津波の直撃を受けたバンダアチェ市街地（2005年2月）

家を失った避難民は約四十二万人に達した。政治・経済・文化の中心で人口が集中していた州都バンドアチエ市の市街地は、津波で三分の一が全壊、三分の一が浸水し、人口の四分の一を失い、アチエの地元政府は機能不全に陥った（写真1）。

「島」と聞くと小さいという印象を受けるかもしれないが、スマトラ島は世界で六番目に大きな島で、日本列島全体をあわせたよりも面積が大きい。アチエ州の面積は約五万八〇〇〇平方キロメートルで、被災前の人口は約四三〇万人だった。日本と比較するなら、東北六県とほぼ同じ広がりをもつ土地に東北六県のほぼ半分の人口が住んでいて、二〇〇四年の津波では東日本大震災の犠牲者数の九倍近い人々が犠牲になったことになる。

アチエはインドネシアで最も西にある州である。首都ジャカルタから飛行機で四時間かかり、中央から見れば辺境の地方だが、歴史的には東南アジアは

西からインドやイスラムの文明が来た地域であり、アチエは古くは東南アジアの西の玄関口だった。かつてこの地にはアチエ王国があり、スマトラ島の特産品である金やコシヨウを求めて世界各地の商人が集まり、インド洋と東南アジアを結ぶ東西交易の拠点として繁栄した。また、東南アジアのムスリム（イスラム教徒）にとってはメッカ巡礼へ向かう船出の地であり、メッカ帰りのイスラム知識人がまず立ち寄る場所でもあった。アチエは、東南アジアにおけるイスラム学の中心地であり、イスラム世界全体を家にたとえたとき、その奥座敷であるメッカにまではいたらずとも、アチエまで来ればその一端に触れることができるという意味で、「メッカのベランダ」と呼ばれた。内陸部や都市部の少数派をのぞき、アチエの人々は基本的にほぼ全員がムスリムだと考えてよい。

2 被災した女子大生の体験

アチエで津波に巻き込まれた人はどのような体験をしたのか。被災から半年までの時期に行なわれたインタビュー調査で収録された被災者ユリダの証言を見てみよう。

ユリダは二〇歳の女子大生だった（年齢はインタビュー時のもの。以下同じ）。六五歳の父親と五五歳の母親、そして医者姉（二七歳）とその息子（一歳）とともに、バンダアチエ市内の自宅で日曜日の朝の家族だんらんの時を過ごしていたときに津波に襲われ、一命を取り留めた。

やや長いけれど、津波直後の体験がよくわかるため、長いまま紹介しよう。

その朝はいつもと同じように私の家族、父、母、

姉と甥と一緒に家にいました。私はドラえもののテレビを見たり、家族とおしゃべりしたりと、休日朝の朝をのんびりと過ごしていました。朝八時ごろ、突然、強い地震が起こりました。時間がたつにつれて揺れはますます激しくなるように感じられました。私たちは皆、家を飛び出しました。近隣の人たちも家から出てきて、それぞれの家の前の通りに座っていました。誰もが地震の激しさに驚き、怯（おそ）えていました。皆がアツラーの名前を唱えていました。緊張感の中、地震は約六分間続きました。

地震が止まると、周囲に穏やかな空気が戻ってきました。家の中に戻ってみると、たくさん物が床に散乱していました。そのときは家を残して逃げるなどという考えはまったく浮かびませんでした。数分後に余震が起こりましたが、最初の揺れほど激しくありませんでした。また家の外へ逃げて、前の通りに座りました。私は、

これこそ神が人間に示された秘儀であり天命であると思いました。

地震の約一五分後、恐怖で逃げてくる人々の泣き叫ぶ声が聞こえました。口々に「海の水が上がつてくる!」と叫んでいました。私は北の方角、海のほうに目を向けました。すると、何とこのとでしよう。巨大な黒い逆巻く波が陸地をめがけて向かってくるのが見えました。(海は)私の家からは三キロメートルほどしかなく、波はどんな近づいてきます。私たちは大慌てで逃げ出しました。私は母の手を取って逃げましたが、父や姉はどこにいるのかわかりませんでした。皆パニックを起こし、緊張で体をこわばらせていました。多くの人たちがてんでばらばらに走り、辺り一帯が大混乱していました。めいめいがばらばらの方向に向かって逃げていたのです。多くの人が住宅地を出て大通りへ行こうとしていました。

混乱の中で父親や姉とはぐれたユリダは、母親を連れて逃げる途中で知り合いに会い、車に乗せてもらう。けれども車は津波に流され、車内に水が流れ込んでくる状況で車中に閉じ込められてしまう。日本のテレビニュースでも、バンダアチエの市内を津波の濁流が流れ、おばあさんが危ういところで二階に上って助かったけれど、その後ろで車が何台も流されてしまったようすがくり返し放映された。

姿が見えなかった父は姉と逃げたのだろうかと考え、私たちが住宅地を出て大通りへ向かいました。三〇メートルほど走ったところで、家族と一緒に車で逃げていたご近所のリドワンさんに会いました。リドワンさんは私たちに車で一緒に逃げようと言ってくれました。あれこれ考える間もなく、私たちはその誘いを受け、車に乗せてもらいました。でも、その数秒後のことです。

大きな波が襲いかかり、私たちは乗っていた車ごと波に強く叩きつけられて沈み、流されてしまいました。車内に水が充満しはじめ、そのまま車内に閉じ込められました。車のドアは開かなくなっていました。あちこちで車が衝突しあっていました。私たちが乗っていた車は、何かに押しつけられるような圧力を感じたかと思うと、他の車が積み重なりあつた上に引つかかっていました。本当に危機的な状態でした。私は意識があつて、何度か誤つて水を飲み込んでしまいました。突然、車の窓ガラスの向うに薄明るい光が見えました。私は最後の力を振り絞つて窓ガラスを蹴破ろうとしましたが、ガラスは割れませんでした。そこでリドワンさんの子が力一杯蹴ると、ガラスが割れました。神様のおかげです。私たちは割れた窓から急いで一人ずつ脱出しました。外に出てみると、衝突しあつた車が積み重なつた上の、地面から五メートルくらいの高さのところ

にいたことがわかりました。なんとか母も車から脱出させようとして、ようやく母の体を外に出したときには、最愛の母はもう息絶えていました。そのとき私たちがいたのは、自宅から一〇〇メートルぐらいのところでした。

私が打ち上げられた場所の浸水の状況は、ほかと比べてそれほどひどくありませんでした。そこは津波の終着点でした。私は母を抱きながら、夕方までそこにいました。その辺りは一メートルほど冠水していました。

夕闇に包まれたころ、私は流れてきた布で母の遺体をくるみ、ちよつと行つてくるね、と母に暇を告げました。車の残骸から下へおりて、父と姉、そして一歳の甥を探しにいきました。ほどなくして姉を見つけたことができましたが、もう息を失っていませんでした。自宅から五〇メートルほどのところでした。私は本当に心が碎けてしまいました

た。自分が経験したことが信じられなくて、大声で泣き叫びました。本当に悪夢のようでした。信じ難いことでしたが、それが私に突きつけられた現実でした。

姉の遺体としばらく一緒に過ごしてから、姉に暇を告げて、父を探しながら自宅に向かいました。しかしこれも天命なのでしょう。未だに父には会えていません。恐らく父は、姉や、そのときは抱いていた姉の子を守ろうとしながら波に巻き込まれて、津波の流れが海へ戻るのと一緒に流されてしまったのでしょう。

自宅に着いてみると、誰もいませんでした。高さ一メートルにもなる黒くて厚い泥の塊と、めちゃくちゃになった室内だけが目に飛び込んできました。窓はすべて割れており、ガラスが外に突き出ているものもありました。めちゃくちゃになった家のようすに言葉がありませんでした。私は立ち尽くすばかりでした。あのとき、すべて

の人が、自分のことだけで精一杯でした。他人を助けられる余力のある人はいませんでした。

それから私は、最愛の母の遺体のもとに戻りました。しかし、着いてみると、自分がここにいるよいかと戸惑いました。「いま私が経験しているこのことは本当な現実なのかしら。まだ信じられない。今朝まで私たち家族はみんな幸せに過ごしていたのに。こんなに短い時間で、みんなあちらの世界へ行ってしまうなんて」と思いました。ショックのあまり、私はほかのことを一切忘れてしまいました。ジャカルタの民間企業で働いている実の兄がいたことも。バンダアチエの街中に大勢の親類がいたことも。そのときの私はきちんとものごとを考えることができず、ストレスで一杯になっていました。

夜がやって来ました。近所の人たちに、大通りに壊れていない建物があるからそこで夜を明

かそうと誘われました。私は、大切な母の遺体の傍にずっと一緒にいたかったので、その誘いを断りました。こんなところで夜を過ごすわけにはいかないから一緒に行こう、と彼らは私に言い続けました。辺りはすっかり暗くなっていました。身の安全を確保するために一緒に夜を過ごそう、と何度も説得されて、私は彼らとともに夜を明けました。

朝になるとすぐに、私は父を探しに再び自宅へ向かいました。遺体に出くわすたびによく見ましたが、父ではありませんでした。近所の人にウレカレン地区に避難しようと言われて一緒に行きました。そこに着いて、初めて私は自分にまだ家族がいたことを思い出しました。そして、ルンバタ地区の祖母と叔母の家に行きました。ここでは、みんな私を見て大喜びし、歓迎してくれました。彼らはあちらこちらで私たちのことを探してくれていました。彼らは、私たちが皆いな

くなってしまったと思っていました。私は起こったことをすべて話しました。彼らは、私が亡くなった母と姉の遺体を葬るために、イスラム教徒としての義務を果たすのに必要なものをすべて用意してくれました。私たちはその日のうちに母と姉の遺体を取りに自宅に戻り、バンダアチエ郊外にある家族の墓地に埋葬しました。兄がジャカルタからこちらに向かっていたので、埋葬は兄の帰りを待つて行ないました。兄は日没ごろにバンダアチエに到着してそのまま墓地へ向かい、私たちと落ちあいました。とても胸がつまりました。兄は私を抱きしめ、これまで私の身に起こったことを整理して私に話してくれました。そのあと、あたりがすっかり暗くなってから、私たちは泣きながら母と姉の遺体を埋葬しました。

津波の被害は私にとっても深い悲しみをもたらしました。私は末っ子で、甘えん坊で皆に可愛がってもらっていました。母も、父も、姉もい

なくなつた今、兄は私といつとも一緒にいて生活を再建するために、バンドアチエに残つて仕事を見つけていることになりました。何があるうと、生きる意欲はもち続けなければなりません。どうか亡くなった家族のみんなが、殉教者として神から恵みを与えられ、神の御許という崇高な場所に置かれますように。彼らがこれまで信仰上の勤めを果たしてきたことが、全能の神の傍で受け入れられますように。

ユリダは一緒に暮らしていた家族四人を津波で失つた。母親と姉は遺体を見つけてきたため、ムスリムとして適切な方法で弔うことができた。父親と甥は行方不明のままなので亡くなつたと決まつたわけではないが、状況から考えて海に流されてしまつたのだらうとユリダは考えている。犠牲者が行方不明のまま、飯に亡くなつても遺体を見つけて弔つてあげることができないというのは、

津波災害にしばしば見られる特徴の一つである。殉教者になるといふことの意味は後述する。

3 津波犠牲者の弔いの困難

遺体が見つかからない／遺体の身元がわからない

地震の場合には、犠牲者は亡くなつた場所にとどまるため、倒壊した建物の「瓦礫がれを取り除いていけば遺体を見つけてことができる。これに対し、津波の犠牲者の遺体は流されて行方知れずとなることも多い。津波に巻き込まれた人は、被災した場所から数百メートル、場合によっては数キロメートルも流されることもある。ユリダの姉の遺体のように流された先が陸地なら見つけることができるかもしれないが、引き波で海に流された遺体を捜すのはかなり難しい。

海に流されていなかったとしても、バンダアチェとその周辺だけで津波犠牲者の遺体は数万体あり、生き残った人々にとつて家族や知人の遺体を探し当てる作業は困難を極めた。住民の九割近くが犠牲となった地区では、遺体の身元を特定できる人がほとんど亡くなってしまっていることもあった。家族や知人の遺体が見つからない一方で、あちこちにたぐさんの身元不明遺体があるという状況だった。

津波が遺していった瓦礫とともに市街地のあちこちに散乱した遺体は、家族の行方を探すうえで重要な手がかりだったが、熱帯の気候の中で遺体の状態は日を増すごとに悪化するため、悪臭や病気発生の原因となることも懸念された。生き残った被災者の救援活動や、その後の生活再建のためには、市街地からできるだけ早く遺体を回収し埋葬する必要がある。しかし、遺族が遺体を見つけて引き取るのを待つのは現実的ではなかった。タイの津波被災地

のように遺体のDNA鑑定のための試料採取が行なわれた地域もあったが、このときのアチェでは、数万人分の遺体を冷蔵する設備やDNA鑑定のための試料を採取するといった対応は現実的ではなかった。

犠牲者の遺体はトラックに積まれ、市内の数箇所の空き地に埋められた。予定していた空き地が他の遺体でいっぱい埋葬することができず、別の埋葬地を探してトラックが市内を走りまわることもあった。復興再建活動にさきだつて遺体の収容は最優先事項の一つとされ、赤十字・赤新月社、NGO、軍、民間ボランティアなどのさまざまな組織が参加したが、遺体の数はあまりにも多く、街角からほぼすべての遺



写真2 遺体を運ぶトラック

体が消えるまでに一か月半を要した（写真2）。

通常のやり方では弔うことができない

ユリダは親戚の助けを借りて母親と姉をイスラム教のやり方で埋葬することができたが、身元がわからないまま多くの遺体を集団埋葬地に埋葬せざるをえない状況では、多くの遺体は通常の弔い方ができなかった。

イスラム教では、人が亡くなった場合、体を清めて白い布で覆い、亡くなってから二四時間以内に埋葬することになっている。しかし、アチェの津波では亡くなってから何日も何週間もたつてから遺体が発見されることもあり、また、遺体の数が多すぎて一人ひとりを清めて白い布で覆う余裕がなく、多くの遺体は遺体収容袋に入れたまま埋葬せざるをえなかった。

集団埋葬地では、埋葬されている一人ひとりの身元がわからないだけでなく、埋葬されている人々の

宗教もわからないままだった。アチェではほぼ全員がムスリムなのでほとんどの遺体がムスリムだと考えられるが、ごく少数ながらアチェにはキリスト教徒や仏教徒もおり、特に津波で大きな被害が出た、バングアチェの市街地に集中して住んでいたため、集団埋葬地には少数ながらもムスリム以外の犠牲者が埋葬されている可能性も考えられた。そのため、集団埋葬地はアチェによく見られるイスラム教の慣習に従った墓地のようなつくりにはされなかった。墓標は置かれず、短い草で覆われただけになった。周囲は柵に囲まれ、入り口に看板が掲げられていることで、かろうじてそこが埋葬地であることがわかるようになった（写真3）。



写真3 墓碑のない集団埋葬地

4 集団埋葬地と尋ね人

殉教者となった津波犠牲者

通常の弔い方と異なるやり方で死を扱わなければならぬということとは、適切に弔われぬという死者にとつての問題であるとともに、適切に弔ってあげられないままになっているという生き残った人たちにとつての問題でもある。アチエの人々はさまざまにまな工夫によつてこの困難を乗り越えようとした。津波の犠牲者を殉教者として扱うことはその一つだった。

イスラム教では、教義のために命を落とした信徒は殉教者として扱われ、死後の世界で通常の死者と異なる扱いを受ける。死後の審判の際に殉教者であることが示せるように、斃れたときの状態がわかるように体を清めずに埋葬する慣行がある。かつて教

義を守るために実際に戦闘が行なわれていた時代には、戦いの最中に斃れた同胞を適切に埋葬する余裕がなかったこともあり、体を清めずに埋葬せざるをえなかつたり、あるいは埋葬すらできなかつたりしたこともあつたのだろう。戦闘で亡くなつたのではない津波の犠牲者を殉教者として扱うということは、家族・親戚や友人の遺体を見つけて清めてあげられなかつたという思いを抱く人に対して、清めなくてもよかつたのだと安心させる働きがある。

集団埋葬地

集団埋葬地も、遺体が見つからないまま犠牲者を弔うための工夫と見ることができる。集団埋葬地はバンドアチエ市とその近郊だけで一〇か所あり、それらのうち最大規模のものには約四万七〇〇〇の遺体が埋葬されている。埋葬地の近くで収容された遺体もあれば、遠く離れた場所で収容されてトラック

で運ばれてきた遺体もある。集団埋葬地に埋められている人の名前も宗教も明らかではなく、明らかなのはただ一つ、そこに埋葬されている人たちが「津波犠牲者」であるということだけである。そのため、通常の墓地のような死者の名前を記した墓石は置かれていない。敷地内にはせいぜい「大人の遺体」「子どもの遺体」という立て札が立ててあるだけで、埋葬されている場所に立ち入ることもできない。

これらの集団埋葬地では、毎年、命日にあたる一二月二六日に津波被災の追悼式典が開かれる。遺族の多くは、知人や家族の遺体と対面することができないまま、いくつかある埋葬地のどこかに葬られているのだろうかと信じて、埋葬地を訪れ、「津波犠牲者」として葬られている知人や家族を追悼する。

これらの集団埋葬地は、アチエ社会の伝統的な考え方に従えば「墓地」ではない。イスラム教徒であるアチエの人々にとって、墓地とは埋葬された死者

一人ひとりの名前を刻んだ墓碑が立てられ、断食明けに墓参りして、草取りなどの掃除を行ない、墓碑のまわりに座ってコーラン（クルアーン）のヤシンの章を詠んで供養する場所である。命日に墓参りする習慣は一般的ではない。

これに対し、アチエの津波犠牲者の集団埋葬地では、命日の一二月二六日に追悼の儀礼が行なわれる。追悼に訪れた人々は、家族・親戚や友人・知人の遺体を実際にそこに埋められているかどうかかわらない。遺体は海に流されてしまったのかもしれないし、一〇か所ある集団埋葬地のどこに埋葬されたかも定かではないためである。来訪者は集団埋葬地の中央の通路に座り、どこに埋葬されているかわからない遺体が眠る想像上の場所に向けてコーランを詠む。

ここで言いたいのは、アチエの伝統的なやり方から従って死者を供養する場所としての墓地になってい

ないために集団埋葬地は甲いの場所として適切でないということではない。その逆で、集団埋葬地は、一人ひとりの遺体の身元がわからない状態でも津波犠牲者を弔おうとする工夫だということだ。

津波で生き残った人々は、自分の家族・親戚や知人の遺体を捜しながらも、遺体を見つけたとき、たとえ目の前にあるのが誰の遺体であるかわからなくても、それを最奇りの集団埋葬地に埋葬した。それぞれの人が目の前の遺体を埋葬すれば、たとえ家族・親戚や友人の遺体を自分で見つけて埋葬することができなかつたとしても、かならずどこかで誰かが埋葬してくれているという確信がもてる。街のあちこちに集団埋葬地があることは、自分が見つけることのできなかつた家族の遺体をきつと誰かが葬ってくれたはずだと思いう手ばかりになっている。これにより、残された人々は、自分の弔うべき人の遺体がそこに実際に埋葬されているか確信がもてなく

ても、集団埋葬地の一つを訪れて死者への思いをめぐらせることができる。集団埋葬地は、目の前にある遺体を弔うことを通じて、自分の大切な人もかならずどこかで弔われていると受け止めるための場になっている(写真4)。

顔写真つきの尋ね人広告

遺体を見つけることができなかった人たちが大切な人のことを思う手がかりにしたのが写真だった。被災から二か月後のバンダアチエ市内では、尋ね人の貼り紙をよく見かけた。顔写真入りの白黒コピーの簡単なもので、市場のように地元の人々が集まる



写真4 集団埋葬地でコーランを詠む

場所や、外国人が立ち寄る空港や災害対策本部に掲示板が設置され、行方不明者の情報が写真とともに貼り出された。モスクや教会、中国系寺院などの宗施設や、救援復興活動の拠点となり支援者が集まる避難所にも看板が立てられ、捜索願が貼り出された。

「探しています」という言葉とともに、行方不明の家族や知人の顔写真と名前を公共の場所に貼り出す動きは、被災から数か月たっても続いた。新聞にも尋ね人の広告が毎日掲載され、それは津波から一年たっても途切れることがなかった。

津波でマラッカ海峡に押し流された被災者がマレーシアの漁船に救助され、数か月後にマレーシアから帰還した例も報じられていた。また、両親とはぐれた子どもの被災者が避難キャンプなどで保護され、新聞広告を見て親戚の手に引き渡されることもあった。その意味で、数か月にわたり捜索願がやま

なかったことは理解できる。しかし、いつまでも続けられた尋ね人の貼り紙や新聞広告にはもう一つの背景があるように思われる。行方不明になっている家族の写真を公の場に掲げることは、万に一つの再会の機会を期待すると同時に、この世での永遠の別れを覚悟したうえで、その人のことを大切だと思っているという気持ちを形にして示すことで、喪失を悼み、その思いを人々と共有する営みという意味にもなる。

5 個人として弔う工夫

共同墓地への再埋葬

津波犠牲者を殉教者として扱うことや集団埋葬地をつくることは、遺体を見つけて自分の手で弔うことができない状況でも大切な人を弔おうとするア

チェの人々の工夫だが、それで誰もが納得できるとは限らない。納得しない人々は、いろいろな方法で個別に犠牲者を弔おうとした。

津波から二年半が過ぎた二〇〇七年八月、バンダアチェ郊外のある村を訪れると、村の共同墓地で探し物をしている人を見かけた。先に書いたようにムスリムは断食月が明けたときに墓参りして草取りするため、普段の墓地は草が伸び放題になっており、探し物はなかなか見つからないようすだった。何を探しているのか尋ねてみると、最近埋葬されたばかりの知人の墓碑を捜しているとのことだった。津波で亡くなった家族の遺体を集団埋葬地に埋葬したときに目印を付けておき、それを掘り返して自分の村の共同墓地に運んできて再埋葬したのだという。

津波直後、集団埋葬地では一つひとつの遺体の身元を確認せずに乱雑に埋葬せざるを得なかったが、

集団埋葬地のすべての遺体が身元不明だったわけではない。被災直後に瓦礫と遺体の山の中から幸運にも親しい人の遺体を見つけることができた人たちもいた。ただし、津波直後の混乱の中で正式に埋葬する余裕がなかったため、目印をつけて集団埋葬地に仮埋葬していた。家族の遺体が墓碑も設えられないまま集団埋葬地に埋葬されていることに落ち着かなさを覚えながらも、自分たちの生活の建て直しを優先せざるをえなかった。被災から二年がたつて、ようやく生活再建の見通しが立つたため、集団埋葬地の遺体を掘り返して村の共同墓地に正式に埋葬したのだという。

墓地に埋葬することで個人の名前を刻んだ墓碑を置くことができ、津波犠牲者でない他の死者と同じように弔うことができるようになる。確かに、津波から二年が過ぎたころから、アチェの各地の村の墓地に二〇〇四年一月二六日を命日とする新しい墓

碑がいくつも見られるようになった。遺体に目印をつけて仮埋葬し、それを二年たってから掘り起こして自分の村の墓地に運んで再埋葬するという姿には、津波犠牲者の遺体を名前のある個人として弔おうとする人々の執念が感じられる。

ただし、すべての人が再埋葬できたわけではない。同じころ、アチエの村の共同墓地を訪れると、遺体を埋葬するために掘ったばかりの穴がいくつも見られた。遺体がまだ見つからないのか、その翌年に再訪してもその穴は開いたままになっていた。穴の部分に草が生えはじめていたことが、この穴が長い間空けられたままになっていたことを物語っていた。そして、その翌年に訪れたときも、その穴は同じように空いたままだった。何年も空いたままになっている穴を見ると、いつか遺体を見つけて再埋葬するという執念を感じるとともに、心の穴が埋められないままにいる気持ちもまた強く感じられた。

復興住宅を改造した土産物店

遺体を見つけて墓碑を立てて弔うことができないことを克服するために、一見すると弔いとは無関係のものに託そうとする工夫も見られる。

バンダアチエ市に隣接する大アチエ県のランプブ地区は、海岸近くに村があり、津波によって集落ごと流され、モスクだけが残った地区として知られている。この地区の住宅再建はトルコの赤新月社が担当し、赤いレンガ屋根と白い壁で統一された復興住宅地は「トルコ村」と通称されている。

トルコ村の復興住宅は、いずれも被災者の住居用につくられていて商店はない。しかし、一軒だけ、津波で流されなかったモスクの正面に、壁を橙色に塗り、サフィラという屋号がつけられた土産物屋がある。復興住宅二棟をつなげたつくりになっていて、向かって左側の店にはお菓子や飲み物が並べられ、右側の店には衣料品が置かれている。衣料品屋をの

ぞくと、アニメのキャラクターの絵が描かれた子ども向けのTシャツが数種類と、大人のムスリム女性向けの服が数種類並べられている。この店の目の前にあるモスクは津波で唯一残った建物としてよく知られているために訪れる観光客も多く、その前に土産物屋を開くというのは悪いアイデアではないだろうが、海沿いのこの場所を訪れる観光客の多くは町から来るだろうから、わざわざここまで来てアニメのキャラクター入りのTシャツを買うとは考えにくい。それなのになぜこのような偏った品揃えをしているのかと不思議に思った。

店の中をさらによく見ることでこの謎が解けた。店の一番奥の壁に額に入った幼い女の子の写真が飾られており、写真の下には「二〇〇四年二月二六日に津波の犠牲になった私たちの一人娘サファイア」と記されていた。この土産物屋の名前は「この女の子の名前をつけたものだった。そう思って店内を改め

て見渡してみれば、衣料品店に置かれていたのは、今や服を買ってあげることができなくなった娘に着せてあげたかったTシャツであり、娘が大人になったときに与えてあげたかったムスリム女性の服なのだろう。そして、隣の食料品店は、娘ののどが渇いたりお腹がすいたりすることがないようにと、子どもが好きそうな飲み物や食べ物を並べているのだろう。

この店舗は、もとはトルコの支援団体が津波被災者に供与した復興住宅である。被災者でない人の個人的な金儲けに使われることを防ぐため、この村に住んでいた人かその遺族でないと復興住宅を与えないなどの条件がつけられていた。津波で何もかも失った人たちに支援団体が提供した復興住宅は、いわば被災者に対して住む家を与えたいという善意の現われであり、それを自分では住まずに商店に改造することは、支援する側の目には約束違反だと映る

かもしれない。しかし、この例に見られるのは、ただで家をもらったので商店に改造して金儲けをしようということではない。ここで見るべきは、本来ある姿から逸脱しているところにこそ、人々の割り切れない思いが込められていることである。

墓標がわりの身分証明書

家族・親戚や友人を失った人たちだけでなく、津波直後に現地入りして遺体の収容を行なった人たちにとっても、津波の犠牲者をどのように弔うかは重要な問題だった。アチエの被災者、域外からのボランティア、国軍兵士など、さまざまな人々が遺体の収容に関わったが、中でも内戦中から遺体の収容を行なってきた赤十字社は、津波犠牲者の遺体の収容にあたっても中心的な役割を担った。

スマトラ島沖地震・津波では、世界各国から赤十字・赤新月社が集まって救援・復興支援に携わっ

た。各国の赤十字・赤新月社は、バンダアチエ市郊外にあるインドネシア赤十字社のアチエ州支部に大きな倉庫棟と本部棟を増設して拠点とした。この施設は二〇〇九年に各国赤十字・赤新月社の拠点としての役割を終え、現在はインドネシア赤十字社が使用している。本部棟の一部は、かつて各国赤十字・赤新月社の拠点として使われていたことを示す展示室になっている。

展示室には赤十字・赤新月社を派遣した各国の旗が飾られ、地図や写真で救援・復興の活動が紹介されている。展示室はそれほど広くないが、当時の活気が伝わってくるようなにぎやかな展示になっている。その一角に、そこだけ静謐な空気が漂う小さな部屋がある。数人が入るだけでいっぱいになるほどの狭い部屋は、壁がガラスケースになっており、収容された津波犠牲者の遺体が身につけていた身分証明書が陳列されていた。インドネシア国民でアチエ



写真6 津波犠牲者の遺体から回収された
遺留品の身分証明書

写真5 墓標代わりの身分証明書が展示されている部屋

州出身であることを示す紅白の身分証明書が多いが、会社の社員証や図書館の利用証などもある。数はそれほど多くはないが、インドネシア以外の国の身分証明書も含まれていた。身分証明証が種類ごとに分類されて一つひとつ丁寧に並べられているようすは、死者の名前を記しておくという意味に加えて、津波直後に集団埋葬地で遺体を乱雑に埋葬せざるをえなかったことに対して、身分証明証だけでも丁寧に並べたいという犠牲者たちに対するせめてもの弔いの気持ちが込められているように感じられた(写真5、6)。

6 社会で共有し、未来に託す

集団埋葬地の扉の言葉

ウレレー海岸に程近いムラクサ地区の集団埋葬地の

扉には、インドネシア語で次の言葉が刻まれている。

命あるすべてのものたちよ

我らはお前たちを試している

よいことと悪いことによつて

試験として

そしてお前たちはいつか

我らのいるところに戻されるのだ

これは、コーランの預言者の章の一部をインドネシア語に訳したもので、通常は以下のように理解されている。

誰でもみな（一度は）死を味わわねばならぬ身

お前たち（この世にある限り）

我らは禍福でいろいろに試験^{（こころみ）}した上で

みな我らのもとに連れ戻す

コーランの章句で「我ら」とは神をさすため、そのことを念頭に置いてこの句を読めば、神が人間に對して、この世に生きているときの苦難と歎びは神が与えた試験であつて、死して神に召されるのであつて、この世においてもあの世においても神が人間を見放さずにいることを説いていると理解される。この章句は、直接的には津波で犠牲となつた人々に向けられた言葉として理解されることになる。

アチエの多数派はムスリムなので、イスラム教の聖典であるコーランの引用を集団埋葬地の扉に刻んだことはよく理解できる。ただし、コーランはアラビア語で下されたことを重視して、コーランの章句はアラビア語のまま書かれるのが一般的である。それなのに、この扉の引用はインドネシア語に訳されてアルファベットで書かれている。

その意味を考えるならば、ムスリム以外が埋葬されている集団埋葬地の扉の言葉は、もともとイスラ

ム教のコーランの一節から取ったものだと、特定の宗教の信徒だけでなくすべての人に向けたものだと理解でき、そう考えれば、そこに込められた別のメッセージを読むことができる。

「我ら」を文字通りわれわれと読むならば、それは津波の犠牲者たちをさす。この扉の章句が犠牲者の眠る集団埋葬地を背にして外側に向けて刻まれていることも、それが犠牲者から生存者に向けられたものであることを示している。そう読むならば、このインドネシア語の章句は、津波犠牲者から生き残った人々に向けて、残された生をこの世で全うできるかを問いかけ、その生き様を今後も見守り続け、生を全うしたときに再会し、その生き様を問うつもりだというメッセージになっている。そして肝心なことは、扉の言葉は津波の犠牲者からの言葉としてあるが、それをこのようなかたちでここに刻んだのは津波で生き残った人々であるということだ。そう

考えるならば、この言葉は、生き残った人々が津波犠牲者の思いやまなざしを背負って津波後を生きていくという決意表明にほかならない。

津波博物館

被災から五年を経た二〇〇九年、バンドアチエ市の中心に位置するブランバダン広場のわきに津波博物館が開館した。ひととき目立つ大きな建物は津波発生時の緊急避難所をかねており、今ではバンドアチエを訪れる観光客が必ず立ち寄る観光スポットになっている。観光や防災教育の拠点としてのみ見られがちだが、津波博物館は、津波による死者を世界の人々と結びつけ、被災の経験を世界に開く場にもなっている。

この博物館は建物の構造そのものが展示物となっている。来場者は順路をたどることで津波に巻き込まれた状況を追体験することができる。入

り口から入ってすぐに地下の間に向かい、「昇天の間」を通じて二階に渡る「希望の橋」までの道のりは、生き残った人々が津波に巻き込まれた状況を追体験するとともに、犠牲者に対する思いを他の人々と共有する仕組みとなっている。残された人々の心の痛みを和らげると同時に、被災を経験しなかった人々やこれから生まれてくる人々と共有する仕掛けでもある。

津波博物館の入り口から「希望の橋」を渡って二階に行くまでのコースを簡単に紹介しよう。入り口を入ってすぐに細くて暗い道がある。ゆっくりと湾曲した道は、両脇を高い壁にはさまれている。壁をつたって水が流れており、水音とともに顔にも水しぶきが飛んでくる。この暗い水の壁の間を縫うように抜けていくと地下広場に出る。照明はなく、天井にあけられたいくつもの丸い小さな窓から外の光がわずかに差し込んでいる薄暗い空間である。窓を見

上げるとそれが池の底で、外の光は池の水越しに差し込んでいることがわかる。これは、津波に巻き込まれた人々がたどりついた海の底を模している。地下広場が思いのほか静謐につくられていることは、津波に巻き込まれた人々が水の中で苦しい思いをしたのではないかと思つて身をさいなむ生き残った人々の痛みを和らげたいという気持ちの投影でもある。

地下広場を抜けた先には高い天井をもつドーム型の部屋がある。ドーム状の壁面をよく見ると、いくつもの小さなタイルが貼られており、一つひとつに犠牲者の名前が彫られている。アチエ州の津波犠牲者である一七万三〇〇〇人の名前すべてが記されているわけではないが、壁面を下から上へと名前が増やされていき、名前が書かれた部分が次第に上部に延びていつている。

床には瓦礫などの津波遺物が置かれ、そこが津波

に巻き込まれた海の底の終点であることがわかる。明かりは最小限に絞られており、薄暗いドームの頂上を見上げると、はるか遠くに小さな円形の窓が見え、そこにはイスラム教の神アッラーの名前がアラビア語で記されている（写真7）。この空間が神々のいる空間につながっており、津波で瓦礫と一緒に流され、水面に再び浮かび上がることができなかった人々は、天の神のもとに召されたことが示されている。この部屋は「昇天の間」と呼ばれている。

この部屋を出ると、ドーム型の部屋の周囲をらせん状にゆるやかに登る道につながる。次第に道は明るくなり、ほどなくして地下広場から見上げた池の水上に出る。池の上には「希望の橋」と名づけられた橋が渡され、津波博物館の二階へと続いている。二階には展示場があり、津波直後にアチエがどのようなようだったか、また、復興の過程がどのようなであったかが写真やジオラマで展示されている。津



写真7 昇天の間上部のアッラーの明かりとり

波博物館の三階は、地震や津波が起こるメカニズムや防災に関わる展示がされている。津波博物館は、アチエの人々が津波被災の経験を人類社会の経験として位置づけなおす試みとして理解できる。

7 世界の中に自分たちを位置づける

津波後のアチエには被災地の救援・復興活動のためにインドネシアの国内外から大勢の人々が訪れた。アチエの復興・再建は、アチエの地元の人々とインドネシア国内外から訪れた人々、そしてそれらの活動を支えた世界中の人々との共同作業として行なわれた。津波は大勢の人々の命を奪ったが、それと引き換えに、アチエの人々は世界との新しいつながりを得ることになった。亡くなった人を弔う営みと重なるようにして、新しくつくられた世界とのつ

ながりを大切にしようとする動きも見られる。

世界の国々にありがとう公園

毎年八月一七日にインドネシアでは全国で独立記念式典が行なわれる。アチエ州では公的な記念式典はブランバダン広場で行なわれる。州内の優秀な高校生が集められ、州知事の前でインドネシアの国旗の掲揚が行なわれ、毎年の記念式典のたびに歴史が更新される場所である。式典に使われるとき以外はサッカーやバスケットボールをする運動公園になっていた。津波が起こった日、この広場では日曜日の朝の恒例の体操集会が行なわれており、バンダアチエ市の市長と副市長も参加していた。また、ここをゴールとする一〇キロマラソンが行なわれていた。ブランバダン広場には津波後に、広場を一周するジョギングコースが整備され、コースに沿って五四の船型のモニュメントがつくられた。モニュメント

には、アチエの復興を支援した国ごとに、国名と国旗とその国の言葉で「感謝」と「平和」を意味する言葉が書かれた。この公園には世界の国々にありがとう公園という名前がつけられた。アチエの人々はこの公園でジョギングしながら、アチエを支援してくれた世界の国々に感謝することができる。

ブランバダン広場には中華慰霊碑も建てられた。米国サンフランシスコの華人団体がインドネシア・ジャカルタの華人団体の協力で建立したもので、黒い石の四角柱をしており、上部に蓮の花と梵字ぼんじをかたどったレリーフが貼られている。塔の本体には、アラビア語、中国語、英語、インドネシア語の四つの言語で書かれたレリーフが各面に貼られている。津波塔（中国語では海嘯記念碑）と名づけられ、数十万人の命を奪った津波が起こった二〇〇四年一月二十六日人を人類史に記録し、この経験を警告とし、思い返し、そして全世界のすべての人類にとって意

味のある知識の糧となるようにとの言葉が記されている。

津波七周年の演説

津波から七周年を迎えた二〇一一年一月二十六日、バンダアチエ市の郊外で行なわれた津波七周年記念式典のことだった。式典で演説したアチエ州知事のイルワンディは、会場に集まっていたアチエの人々に対し、私たちはかつて互いに銃を向け合った罪を背負っており、七年前の大災害を契機に新しい社会の建設に取り組んでいるが、自分たちが過去に犯した過ちを決して忘れることなくこれからの暮らしを営んでいこうと呼びかけた。そして、同じ年に発生した東日本大震災に触れ、私たちがアチエの経験を世界にきちんと伝えることができているなら、もしかしたら日本人たちの犠牲者を減らすことができず、自分たちの経験をうまく発

信できていなかったことが悔やまれると語った。これは、未曾有の大災害に襲われたアチエの人々が、世界中から関心と支援を受けて復興の道を行ってきたことに深く感謝するとともに、大災害を経験した自分たちがこれからどのように生きていくのかを世界に示すことが、津波で亡くなった人々に対しても、また関心と支援を寄せてくれた世界の人々に対しても報いることになるという強い思いの現れと理解できる。

津波グラウンド・ゼロ

津波に耐えた木麻黄の木やモスクがあるウレレー海岸からムラクサの集団埋葬地の帯は現在「グラウンド・ゼロ」と名づけられている。これは、二〇〇一年九月一日に発生した米国同時多発テロの現場が「グラウンド・ゼロ」と名づけられているのに重ねられた命名である。アチエの津波被災をア

チエだけのものとせず、世界の津波犠牲者追悼の地として位置づけようとするアチエの人々の思いを見ることが出来る。二〇〇四年のスマトラ島沖地震・津波はインド洋沿岸諸国に被害を及ぼし、さらに観光などでこれらの土地を訪れていた外国人にも犠牲が出ていることから、たとえバンダアチエ市内の集団埋葬地にインドネシア人以外の遺体を実際に埋葬されていなかったとしても、これらの集団埋葬地はアチエ州やインドネシアの枠を超えた津波犠牲者の弔いの場と見ることが出来る。死者の名前が記されていないことが、ここでは人類社会の災いとしてアチエの津波被災を位置づけることを可能にしているといえるだろう。

この地域には津波避難棟をかねた津波防災研究センターや津波博物館、集団埋葬地などが集まっており、防災教育や防災研究を志す研究者や若者だけでなく、観光客も多く訪れている(写真8)。





图 28 建设中的木里瓦里什-毛尔塔拉清真寺（摄于 2004 年）

おわりに…弔うこと

アチエの津波被災地のようすから私たちが学ぶことは、災害に見舞われて生き残った人たちは、亡くなった人たちの死を無駄にしないようにしようと、さまざまな工夫をこらし、その思いが災害後の社会づくりを支えているということである。

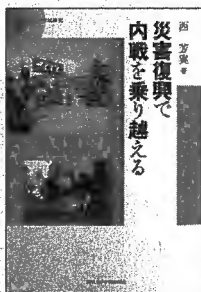
弔うことは、生き残った人が「その後」をどう生きるかを問う営みでもあり、またそのことは、次の世代に何を託すかを問うということでもある。

いま私たちが暮らす社会も、じつは大勢の不慮の死を乗り越えて築かれている。数々の大規模な自然災害だけではない。アジア太平洋戦争では、多くの人が海外で命を落とし、遺骨が見つからないままになっている。また、日本そのものも戦地となった経験をもつ。沖縄での地上戦、空襲、原爆。私たちは亡くなった人たちを直接には知らないかもしれない。また、戦争や災害で身近な人を失った遺族の知

り合いも身近にいないかもしれない。けれども、私たちがいま暮らしている社会は、そうした人たちがたくさん不慮の死と向き合う中でつくられてきた。災害で身近な人々を失った人たちの想いに寄り添ううえで、私たち自身が暮らす社会が経験してきた不慮の死とそれを受け止めてきた人々の想いを想像することが助けとなるはずである。

◎◎◎ 参考文献

- ・西 芳実 2014 『災害復興で内戦を乗り越えるースマトラ島沖地震・津波とアチエ紛争』 京都大学学術出版会
- ・西 芳実 2015 「記憶のアーカイブースマトラ島沖津波の経験を世界へ」 貴志俊彦ほか(編) 『記憶と忘却のアジア』 青弓社 44-65頁



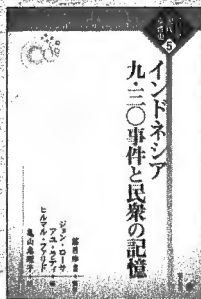
災害復興で内戦を乗り越える ——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争

西芳実著、京都大学学術出版会、2014年

津波により自然災害と内戦という2つの災いからの復興に取り組むことになったインドネシア・アチェ州の9年間の歩みを記録した研究書。大災害をきっかけに社会はどのように生まれ変わろうとしたのか。地方政府、学校、援助団体、博物館、メディアなどが果たす役割とともに、人々の心の復興過程もたどる。

「大東亜」戦争を知っていますか 倉沢愛子著、講談社、2002年

インドネシアの人々が経験してきた「災い」の一つである日本軍政期についての入門書。日本はかつて「大東亜共栄圏の建設」をうたって東南アジア各地に軍を進駐させ、占領軍政をした。軍政による統制経済政策や住民動員政策は人々の生活を一変させ、その記憶はその後の日本とインドネシアの人的交流にも大きな影響を与えている。



インドネシア ——九・三〇事件と民衆の記憶

ジョン・ローサほか編／亀山恵理子訳、明石書店、2009年

30年余の長期政権となったスハルト政権はインドネシアに経済成長と安定をもたらしたが、その成立期には数十万人に及ぶ大量虐殺があった。本書は、今も十分な名誉回復が行われていない被害者らへの聞き取りをもとに、長いあいだ封印されてきた事件の記憶を社会に開き、それにより社会の亀裂を修復する試みである。

